元寮母・小西綾子さんを偲ぶ

平口　哲夫

小西綾子さんの訃報を知ったのは、二〇一一年八月三一日(水)午後一〇時半頃に嵐護兄から届いたメールによります。八月二九日午後七時四〇分に永眠、九月一日午前一〇時から告別式が行われるので、寮関係者にメーリングリストで知らせてほしいとのことでした。このメールを見たのが午後一一時半頃のことであり、さっそくメーリングリスト宛にメールを転送したのですが、あいにく翌日午前中、所用のためお悔やみのレタックスを送る暇がなく、失礼をしてしまいました。

おばさんのご様子については、四年前にやはり嵐兄からメールで知らせがあり、三男の泰彦さん夫妻といっしょに特別養護老人ホームに入っておられるおばさんを訪ねたけれども、おばさんが嵐兄のことを認知できたかどうかは分からない状態だったとのことでした。また、二男の晴彦さんがすでに亡くなっていたということも、このメールで知らされた次第です。そこで機会を見てお見舞いに伺おうと思っていたのですが、実現できないうちにおばさんは逝ってしまわれました。

一〇月二一日から二四日にかけて仙台方面に東日本大震災のお見舞いがてら考古学・ワイズメンズクラブ関係を訪ねたのですが、教会・渓水寮関係を訪ねる余裕がありませんでした。そこで十二月九日から十二日にかけて仙台方面を改めて訪問することにし、泰彦さん宅にもお伺いしたいと、連絡先を尋ねるメールを嵐兄に送ったところ、なんと泰彦君も一年前の八月に亡くなっておられたということを知らされたのです。これはおばさんの訃報に増して心痛む知らせでした。これは何としてでもご遺族に直接お悔やみの言葉を申し上げたいと、泰彦さんの奥さんである幸子さんの住所と電話番号を嵐兄に教えていただき、十二月一二日(月)午前中、幸子さん宅を弔問することができたのでした。

小西綾子さんは、大正九(一九二〇)年一〇月二七日熊本県人吉生まれ、私の母よりも六歳若いだけですから、私とは親子であってもおかしくないご年齢です。満州から引き揚げてこられたというご経験があり、その後も何かと苦労なさったということを、寮生のときにご本人から伺っております。でも、満州時代のことについては地元の人から料理を教えてもらったことなど、楽しい思い出しか語っておられませんでした。東北大学基督教青年会会報第八号の「青年会館日記」には、一九六一年十月五日に「小西新寮母さんの歓迎会」が開催されたことが記されています。また、同会報第一四号の「青年会館日誌」には、一九七五年十一月二九日に「小西寮母さん、十数年間の働きを終え、退職される。寮生で感謝会を持つ」と記されています。おばさんは、ほぼ一四年間寮母を務められたことになります。

私が入寮したのは昭和四〇(一九六五)年ですから、寮母四年目のおばさんにお世話いただくことになったわけです。当時、長男の秀恭さんは別居していましたが、当時小学生であった、二男の晴彦さんと三男の泰彦さんは寮に同居、ハコチャン、ヤッチャンという愛称で寮生に可愛がられていました。同年十一月三日、新入寮生歓迎ピクニックで奥新川に行ったときの写真には、寮生に寄り添った二人の姿が写っています。おばさん手作りの弁当を大学の考古学研究室で開いて食べていると、研究室のスタッフが羨ましがって覗きにきたものです。あるとき、スタッフのうちの一人がその弁当をこっそりどこかに隠してしまい、いざ食べようとしたときに弁当がカバンに入っていないのでいぶかしむ私を見てニヤニヤ、というイタズラもありました。献堂式記念会やクリスマス祝会の開催日が鯨肉の大量入荷とうまく重なったときには、鯨肉を市場で安く購入し、その大きく分厚い一切れ一切れを叩いて柔らかくし、ニンニク醤油に浸してからコロモをつけて油で揚げたものが晩餐に出されました。これが実に美味しかったのを憶えています。

一九六九年三月に退寮して米ヶ袋で間借り生活を始め、四月から

修士課程に進んだ私は、それから五月にかけて青森県下北半島脇野沢にある弥生時代遺跡の発掘に参加しました。この発掘調査期間中、なにやら肛門のあたりが腫れて痛くなり、宿泊施設の浴室で洗っているときに膿胞が破れました。なぜこういうことになったのか。思い当たるのは、引越しの準備をしている三月末に下痢をして、切痔になったことです。この傷から細菌が入ったのでしょう。調査が終わって通常の生活に戻ったのですが、再び同じ箇所が腫れて痛くなってきたので、小西のおばさんに相談したら、評判のよい肛門科医院を紹介してくださいました。診断は「痔ろう」、手術をしなければ完治せず、手術はメスで切るのではなく、患部の根元を糸で括り根元に薬をつけて徐々に焼きとるという方法なので、症状によっては一ヶ月ほど入院する必要があるとのこと。まったく出鼻をくじかれた思いになり、一晩考えさせてもらってから覚悟を決めて入院しました。おかげで再発することなく今日に至っております。

一九七一年四月、博士課程に進むとともに渓水寮の主事として再度寮生活をすることになり、二年間主事をいたしました。一九七四三月に博士課程単位取得満期退学となり、四月に金沢医科大学教養部(現・一般教育機構)に就職しました。その翌年に寮母を退職されたおばさんは、国分町で「家庭料理　小西」という居酒屋風のお店を始められました。私も二、三度立ち寄ったことがあります。五五歳頃に始めたこのお仕事は七六歳頃にお止めになったということですから、二十年ほど続けられたことになります。この間、大学関係をはじめとする多くの方々にお店は親しまれたようです。

小西幸子さん宅をお訪ねしたとき、東松島で大津波の被害に遭われたご尊母が身を寄せられておられました。仏壇にお参りしてから居間に戻ると、壁に泰彦さんとおばさんとご尊父のご遺影が飾られていることに気がつきました。泰彦さんのお写真は、子どもの頃のほっそりとした体つきとは違って、眼鏡をかけた堂々たるスポーツマンという感じでした。おばさんが入っていた特別養護老人ホームも、泰彦さんが入院していた病院も良いスタッフに恵まれていて、心のこもった手厚いケアとキュアを受けられたとのことです。泰彦さん夫妻には拓也君と竜太君という息子さんたちがいて、二人とも結婚してお子さんも生まれています。つまり、おばさんはすでに曾孫に恵まれておられたのです。また、竜太君一家はご実家のすぐ近くに住んでいて、泰彦さんが情熱を傾けていた総合型地域スポーツクラブ「ＮＰＯ法人ＰＯＰ仙台」の運営を引き継ぎ、幸子さんと協力して活動しているそうです。「おばさん、よかったね」と、私は心の中でご遺影に語りかけ、また幸子さんには「お母さんを大切に、お元気で」と挨拶し、ご自宅を後にしました。